

嘉庫 嘉悦大学学術リポジトリ Kaetsu

University Academic Repository

嘉悦学園100周年記念・研究論集の刊行にあたって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2003-10-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐野, 陽子, サノ, ヨウコ, Sano, Yoko メールアドレス: 所属:
URL	https://kaetsu.repo.nii.ac.jp/records/74

嘉悦学園 100 周年記念・ 研究論集の刊行にあたって

学 長 佐 野 陽 子

嘉悦に四年制の経営経済学部が誕生したのは、21 世紀初頭の 2001 年である。ひるがえって、日本ではじめて女子のための実業学校、すなわち私立女子商業学校が誕生したのは、20 世紀初頭の 1903 年であった。

この 100 年をふりかえると、今昔の感を深くする。いまの学生には思いもよらないことかもしれないが、日本では 20 世紀の半ばまで、「男女 7 歳にして席同じからず」ということで、男女共学は許されなかった。また、女性に学問は必要ないといわれ、大学レベルの高等教育を受けることができなかった。専門学校（旧制）のみが、女性の最高教育機関であったのだ。

嘉悦の旧制専門学校化は、1929 年である。当時、嘉悦孝は、東京商科大学（現一橋大学）を模して、女子の商業教育最高学府をつくらうとした。事実、1982 年の嘉悦女子短期大学までの約 50 年間は、日本ではほぼ唯一の、女子のための経済専門学校であった。そして、創立以来 80 年の長きにわたり、経理や経営という男女が競合する分野の人材を育てようとしたのが嘉悦孝であり、その実績を示したのが卒業生たちである。

21 世紀初頭に立ち、これからの大学の発展を想うとき、嘉悦にこのような伝統のあることは、誇りであり大いなる遺産だといえる。いま、実学というと、大学教育の合言葉のように飛び交っているが、嘉悦こそ旧制専門学校時代から、会計や経営などの専門的な実業を女性に教えようとした実学の祖である。同時に、実学を育てることは、実学の背後にある研究の基盤が築かれてこそ実現するものであろう。

嘉悦の紀要の歴史をたどると、半世紀の変遷がある。1955 - 65 年の『研究論集』、1966 - 81 年の『日本女子経済短期大学研究論集』、1982 - 2000 年の『嘉悦女子短期大学研究論集』を継承して 2001 年からは『嘉悦大学研究論集』と名称を改めた。このとき通巻で 80 号である。本号は、100 周年記念特別号であり、通巻で 83 号となる。1950 年の短期大学の発

足以降の研究成果が紀要として刊行され、今年で48年になる。

これからの人材は、商学や経済学という狭い分野の専門家ではすぐに寿命が尽きるであろう。また、「ものづくり」とか、「土地やハコモノ」というような固いものは魅力を失いがちである。知恵や感性や交歓をひきだし、ゆさぶるような活動が共感を得ている。ビジネスの成功とは、利益や名誉を得ることだけではなく、価値観の多様化を反映して、人も、会社も、団体も、その活動の目的は多様になっている。実学はいまや、多様な成功に役立つものでなくてはならない。

さらにまた、技術・産業が絶え間なく複雑化・高度化する現代において、求められているのは創造的・革新的な行動である。大学は知の殿堂として、創造性をはぐくむ最適の場所にならなければならない。公立であろうと私立であろうと、大学には社会の貴重な資源が投入されている。そのアウトプットは、人的投資を通して社会に還元すると同時に、研究者としてその成果を世に問うことはつねに期待されているところだ。

同時に、グローバル化は国際競争によってビジネスの地図を塗り替えている。これは研究や教育の世界でも同じで、有用なものはめまぐるしい速さで利用され、取り入れられる。1980年代には、日本的経営がもてはやされ、国際的な学会において話題を独占していた。日本の経済・経営の実績が目覚ましかったからだ。しかしそれがかげつた1990年代を通じて、国際的な舞台では急速に影が薄くなった。それは、海外で日本的経営の役に立つところを吸収し終えたからだろう。このように海外では、大学・研究者・実務家・企業は交流が盛んであるし、人材も移動する。つまり、実学があたりまえであり、それがグローバル・スタンダードなのである。

新しい実学の基盤を研究することは、21世紀を通じてはばたくひとびとを、ブラッシュアップすることに通じる。嘉悦大学には、まもなく4年生が生まれ、陣容がすべて整うことになる。『嘉悦大学研究論集』はこの記念号を期に、百年の軌跡からさらなる飛躍へ、フロンティアを追い求めることだろう。